

# ZEN

全道展交流紙  
2016.8  
No.52

## 第71回全道展の審査を終えて思う



総合審査委員長  
絵画部門審査委員長  
矢元 政行

今年も2日間にわたり審査が行われた。

71回展は、昨年の記念展後ということで出品者の気持ちも作品の質もトーンダウンしているのではないかと危惧しながら審査に臨んだが、そんな心配は無用であった。作品はよかった。特に、一般出品者の頑張りとそこにある新たな展開が目をつけた。71回展は全道展が次のステップに踏み出す一歩となったのではないと思う。

全道展は絵画、版画、彫刻、工芸の4部門があり、それぞれが独自に行う部門審査を経て、最後に全員による総合審査で決定される。今年はこの全道展の大きな特徴である総合審査の在り方についても熱く論議されたのはよかった。

さて、絵画の審査だが、私は、完成度が低くても、光るものがあればと思っていつも審査に臨んでいる。絵画作品の本質的な論議がなされなければ、このような作品は日の目を見ないが、今回は絵の内容について多く論議されたように感じた。厳しい審査であったが、多種多様な表現を認めた質の高い作品が並んだと思う。

今回、最高賞である協会賞の作品は、迫力があり、強烈なインパクトがあった。何より大作を4点も出品し目



を見張った。中でも私が注目したのは道新賞の作品であった。幾つものキャンバスを組み合わせ一つの大きな作品としている。組み合わせ接合部分に課題はあったが、中央の人物を取り巻く都市景観の表現がよかった。この作家の持っている情感や雰囲気がよく出ていた。

全道展は若い作家に期待を寄せている。その一つとして今年から23歳以下の出品料を半額にしている。そして、八木賞に21歳の若い作家が選ばれた。若いときに多くの挑戦の機会を得られることは大変励みになる。私自身も公募展に大変助けられた思いがある。

審査終了後、川本事務局長と二人で道新の記者からインタビューを受けた。

71回展の審査の状況や作品の傾向について、さらに全道展の存在意義から、今後の方向性に至るまで聞かれた。十分な応答ができたかは分からないが、全道展の魅力は、「作家を育てること」「作家自身の絵に向かう厳しい姿勢があること」「作品を重視すること」ではないか等を伝えた。何よりも作家個々の中で存在感を持ち「光」を放っているところが全道展の素晴らしいところだ。

また、どの公募展も今悩み模索している。「出品者の減少」「若者の公募展離れ」「会員の高齢化」等、質問されながら会の在り方について改めて自分自身の問題として考えなければならないと思った。

私は、全道展に育てていただいた。だから絵を描き続けることができた。全道展の発展を祈念している。



## 求められる 多様性への視点

版画部門審査委員長  
北川 佳枝

今展総会にて、審査のありようとして「美的ポリシーを発掘する（審議）」という表現があり、姿勢を明快に示したこの言葉は心構えとして強く心に響き残っている。

版画部門、会友の搬入点数は28点。昨年より減少したが、それぞれ意欲的に技術を磨き仕上げてきている時間が見え、密度の濃さを感じた。

新会員の本田弘子さんのリトグラフ「鴉争—いくさ」は、巧みな構成、鮮やかな色彩が惹きつける劇的で華やかな作品。坂みち代さんの銅版「春（雪どけの頃）」は、写実と印象、光と影、視点とテクニックが見事に調和した作品。会友賞の中嶋詩子さんの木版「冬支度」は、絞られた透明感の深い色彩の清冽さが染み入る作品。版種技法は違うが、その特色完成度は印象に残る。

一般の部の搬入点数は61点。木版15、銅版9、シルクスクリーン3、孔版2、29点が入選した。松浦進さんのシルクスクリーン「one's cherished opinion」独自の世界がさらに奥行きを深め物語性がある。相馬瑞恵さんの動きを表現した銅版「技ありゴール」、山本俊さんの素朴で温かい木版「ひとやすみ」、技量が評価され会友推薦となった。

佳作賞は木全佑衣さんの銅版「風の声がかきこえる夜」、富田忠征さんの木版「誕生の軌跡Ⅰ」。線と面、描写の集中力が作品を大きく見せている。奨励賞の坂東伸之さんのシルクスクリーン「窓の中」閃きと大胆さが斬新。今展、八木賞、協会賞、道新賞を選出できず残念であったが、一層、工夫試作を重ね、美意識と表現が共鳴する作品で挑戦し続けてほしいと思う。また、一部版を使った立体作品展示について検討があり、審査基本として「作品本体が版画でなくてはならない」が多数見解であった。益々広い視野と知識、多様性への柔軟さが審査視点に求められていくだろうと感じている。

現在、高質で緻密なコピー画が瞬時に拡散する日常である。同時に一方、手作業の地道な表現も評価され価値化する。複数刷り芸術である版画に魅力を感じ、技法を探り、創作表現に真摯に取り組む、高精度の機器が超えられない思いや奥深さがある。近年出品数の減少が続き危惧もあるが、今展版画部入口に掲げた版種技法の説明パネルは、作品技法の理解、関心が新たな版画制作作家へ繋がる、その一步の道標となればと思った。

「美的ポリシーを発掘する」審査を終えて、その光の輝きの刺激的な充実を願うとともに、発掘の現場はまた研鑽の磁場であることを忘れず修練を心掛けていきたいと思う。



## 厳しい社会状況 のなかで

彫刻部門審査委員長  
野村 裕之

美術を取り巻く環境が年ごとに変化して表現方法、表現媒体、価値観等大きく様変わりしている中、公募展としての全道展の役割が大きく変わってきていることは、会に関わっている方なら誰も感じていることではないでしょうか。傍流が主流に取って代わり、全道展伝統の表現方法は古典へと押しやられ、若い人たちに魅力的に映らない。彫刻部でもそれが一般応募の数として現れています。高校や大学を見ても彫刻に取り組んでいる生徒がすごく減っている、寂しい限りです。しかし人間は石器時代から石を彫り、青銅時代からブロンズを鑄造し木を使い漆を使い石膏を使って、造形の確かなバトンを受渡してきたのですから、そのバトンをここで途切れさせることなく次の世代に渡していく使命がある、と心を奮い立たせ制作に発表に励んでいこうではありませんか。

そんな中、心強い傾向として第二の人生の挑戦として全道展に応募していただいている方が多く見られる事が挙げられます。確かな実力を持ちながら制作の時間を十分に取れなかった方、新たに造形を楽しみ始めた方など色々ですが、素晴らしいことで我々は心から歓迎しています。美術の楽しみを持って歩むことがどれだけ人生を豊かにしてくれるか、共にそれを分かち合っていきましょう。ただ一点注意していただきたいのは、我々は交流しながら刺激し合いお互いの作品を向上させていくことを目的としている会ですから、なるべく新作で応募していただきたいと思います。たとえ一部を焼き直したとしても造形に影響を与えなければ新作とは認められない、と審査で確認されました。規定では道内公募展未発表のものとなっています。頑張ってください。

新会員の佐藤雅奉さんの作品はいつも力強いですが、そこに丁寧な造形力が加わり評価が高まりました。持ち前のパワーで全道展を引っ張って行ってください。道新賞の佐藤邦子さん連続受賞で文句なく新会友に推薦されました。等身立像をまとめ上げる力、素晴らしいです。佳作賞の石橋周子さんユーモラスな中にも確かな造形感覚が評価されました。奨励賞の菅原清弘さん巧みな木彫の技術、来年の作品が楽しみです。八木賞の兒玉奈由さん三角の繰り返しに3本の円弧が効果的でした。

彫刻部に出品してくれている若い作家たちを取り巻く社会状況は大変厳しいものがあり、それが今年の作品また会員会友の不出品に現れていたのが今回の展示で一番印象の強い点です。若い人たちが制作を続けていけるよう、応援する形を作って行かなければなりません。バトンを受け継いでもらいましょう。



## 新展開を 楽しみに

工芸部門  
審査委員長

片岸 法恵

入選・入賞・新会友の皆さま、おめでとうございます。  
制作の環境は人それぞれ、数々の困難を克服しての出品、  
ありがとうございます。

工芸部には今年も陶芸・ガラス・金属・漆芸・絞り・  
織・木彫と数々の分野の作品が出品されました。素材も  
多様です。それぞれの作家が持つ技術を尽くし、丁寧  
にかつ大胆に、そして制作の苦しさとおもしろさと作者の思い  
が込められた作品達ですが、おもしろさ・美しさが苦しみを  
覆い隠していると感じます。

力のある人々からの出品が多いようですが、力を出し  
切れていないと感じる物や、欲張り過ぎていたりと感じる  
作品もあり、勿体なく残念に思います。複数点出品され  
ると、制作の方向性や苦心点、問題点が見え、次が楽し  
みになりますし、講評会でのお話もしやすくなります。

会友の方々からも、従来の傾向の作品と、新たな挑戦  
の2作品が出品され、これからの新展開が楽しみになり  
ました。多くの物を見て、許される限り触れて、自身の  
力とし、次の作品に表現されることを願っています。

日々の生活の中で目にし、手にする物達の素材が作品  
となり、工芸の「用と美」だけに留まらない全道展の作  
品達は様々な美しさと喜びを持っています。

『なぜこの素材、この技法なのか』と多様な出品作品に  
会員も自身の専門分野の制作に留まらず、新しい素材、  
新しい技法に挑戦し研究をしています。

いつか出品された全員の作品を陳列したいと言う日が  
来ることを願っています。



全道展 充実のホームページ

会員、会友の個展やグループ展情報を常に更新!

<http://www.Zendouten.jp>

# 第71回全道展 個性の魅力、次の挑戦に熱いエールを

2016年6月15日(水)～6月26日(日)

## 第71回 全道展授賞式・懇親パーティー



—6月18日(土)全日空ホテル授賞式会場—

第71回全道展は4部門(絵画、版画、彫刻、工芸)の一般応募総数493点、そのうち201点が入選し最高賞の全道美術協会賞を含む入賞数は31点であった。

今年は若手の応募が増え、初出品での入選、入賞作品が目立った。一方でベテランは自分の世界で堅調に結果を出した一作品や制作に対するそれぞれの思いを寄せてもらった。

### 全道美術協会賞 [絵画] 宇佐美修一=根室市

私のモチーフの原点、根室春国岱。この2、3年で大きく変貌し、私にとって大切なモチーフが朽ち果てて行く姿は本当に残念でならない。けれどもさすが自然の力はすごい。朽ち果てた老木から懸命に生きようと新しい命が来ている。樹木の中に臓器があり、血液が流れ生きているのか。制作が終わりふと自分に戻り、清々しい気持ちと達成感が後に残った作品。謙虚に努力。感謝。

### 北海道新聞社賞 [絵画] 佐々木 剛=札幌市

これから北海道で生活するため、自分の場所と思ひ出品致しました。受け入れて頂きありがとうございます。

精進いたしますのでよろしくお願い致します。

### 北海道新聞社賞・新会友 [彫刻] 佐藤 邦子=苫小牧市

「彫刻的に量が存在するということはどういうことか」「漆という素材が求める最上のフォルムとはどういうものか」ということを考えながらいつも制作しています。こう書くと、目標は大層高く、立派に聞こえるのですが……。自己満足と落胆のくり返しの毎日。心細さと孤独。それが現実です。今はただ愚直に、一步一步前へ進んでいくしかありません。

### 八木賞 [絵画] 堀江 理人=札幌市

今回このような賞をいただき、驚きを隠せません。私は全道展が今回初出品で、高校時代には学生美術全道展に出品していました。会員の先生方に講評してもらい、刺激を受けたのを今でも覚えています。全道展では自分の力はどう程のものなのか、試したいと思ったのが今回出品した動機です。この受賞をいいプレッシャーに変えて今後の制作に臨んでいきたいと思っています。

### 八木賞 [彫刻] 兒玉 奈由=札幌市

三角形になにか心惹かれるものがあり、三角形をとにかくたくさん作って繋げてみよう、というところから今回の作品を作りました。思うままに繋げていくと良い感じの曲線が出来てきて、(座っている人やエビフライに見える時もありました)勢い良く前脚をあげる馬のように感じたので、たてがみを付けて完成させました。

### 佳作賞 [絵画] 桔梗智恵美=滝川市

私は酪農家の娘でした。家に帰ると友達の家までは遊びに行ける距離ではありませんでした。本を読んだり絵を描いたり、仔牛の世話をしたり。夜になると目を凝らしても何も見えない真っ暗闇が牛舎の向こうに息づいていました。

今も、私の中には、子どもの頃の自分がいて、忘れたくないあれこれを描いて、と嘯いています。描き続けたいと、思っています。

### 佳作賞 [版画] 富田 忠征=旭川市

40億年もの間、一度も途切れることなく連綿と受け継がれてきた生命の凄さ、様々な環境に対応し進化し続けてきた生命の強かさ、そして個々の生命のか弱さといとおしき、そんな生命の足取りを思いながら制作しました。あまりにも大きすぎるテーマですが、空想だけは自由に…と、劣化しつつある創造力に鞭打ってこれからも制作していきたいと思っています。

### 佳作賞 [彫刻] 石橋 周子=釧路市

ここ数年魚をモチーフにしています。今回は、世にも不思議な立って歩く鯛怪獣!? 実はこれ私の化身。二つの意味を込めています。「私の作品に酷い言い方や批評に耐えられません。自由に歩かせて。それから、暗いニュースが多く減って来ます。せめて私の作品を見て一刻でも明るく楽しく笑って下さい」見る人すべてに幸せを届けられますように。

## 佳作賞

〔工芸〕木俣 猛=浦河町

以前住んでいた十勝の風景を思い浮かべ作品をつくってみました。中央に針葉林に重く垂れこめる冬の厳しい雲をイメージし、周りに陽に照らされた柔らかな雲を配しました。同じように見える夕映えも地域ごとに特徴がありその印象が表現できればと制作しました。今後も感性を表現できる作品をつくり続けられればと思っています。

## 新会友

〔絵画〕モリケンイチ=札幌市

今回の作品のイメージは、多少の変更はしていますが「三車火宅」の喩えから着想しています。遠景の燃える木と前景に配置した姉妹—瀕死の鳥を救おうとする妹、その妹を守ろうとする姉—を描くことによって、危機的状況に抗する慈愛の重なりを暗示しました。戦争、災害、環境破壊などの様々な不安要素に囲まれる現代において、何が最も必要なかを問いかけた作品です。

## 新会友

〔版画〕松浦 進=札幌市

日頃、版画の技法と向き合いながら色々な表現に挑戦していくなかで、自身の作品を「版画作品」として受け入れてもらえるのかという気持ちも抱きながら、「そんな事どうでも良いか」とも思って毎年、出品させていただいております。今後も様々な挑戦と遊び心を持って出品したいと思います。よろしくをお願いします。

## 奨励賞・新会友

〔工芸〕田中 豊=釧路市

この度は奨励賞ならびに会友に推薦していただきありがとうございます。1月から制作を開始し4つの作品を作りました。順次焼成しましたが、素焼の段階で3作品に小さなヒビが入り完成できませんでした。最後に制作したものが本焼までいたり完成することができました。前々から構成を練っていた作品です。今後もこの化粧土を使い制作を続けたいと思います。

## 新会員

〔絵画〕佐藤 静子=苫小牧市

昨年アルタミラ洞窟を見てきた。1万年～2万年前の旧石器時代の人達が、洞窟の天井いっぱいに描いた、野牛や馬やトナカイの躍動する姿は、その描写力で観る者を圧倒する。彼らはただ狩の成果として獲物の数を記録したかったのか、それとも人間にはこの美しい生き物を純粋に描きたいという、やむにやまれぬ祈りのようなものがあるのではないかと思う。

## 新会員

〔版画〕本間 弘子=札幌市

新しい立場を与えられ、これからまた違う心がまえで、作品と戦っていかなければなりません。日々、私の上に降りてくる言葉や映像、消えてしまいそうな残像を作品にどう置き換えるか、私自身との戦いでもあります。その結果、何を見出すことができるのか、満足するか、虚しい思いに涙するのか、今後の自分の行く末にわくわくしています。

## 新会員

〔彫刻〕佐藤 雅奉=滝川市

長～いトンネルに入り込んで43年。出口がなかなか見え、壁にぶち当たり炎上したり、進路変更を試みたり時には休憩したり。あっという間に息子に追い越され、ワイフには追い越されそうになり、さて「どうしたもんじゃろのお～」と途方に暮れていた時の朗報。しかし、最終日に岡沼先生から「雅奉は後10年大作を彫らんとダメだぞ」と叱咤激励され沈没。今度は潜ります……

## 会友賞

〔絵画〕山本美登里=札幌市

「君は丸いものを丸く描けないのだね」。情けなくうつ向く私に、師は「左手で描くか、手元を見ないで描いてごらん」と言った。ずいぶん昔のことである。演出家の蛭川幸雄さんは、平均年齢77歳の一般人だけの劇団で老いの不自由さの中に演劇的な美をみ出したという。

下手でも老いても、それを個性に転じていけるなら、私もまだ希望が持てるだろう。でも、それが難しい。

## 会友賞

〔版画〕中嶋 詩子=札幌市

季節は冬のはじめの頃。そう霜の降りた朝。ハス池では水鳥達が動き出す。私の頭のキャンバスにぼんやり作品の形が見えました。ポイントは広い水面の表現。薄く何度か調子を見ながらぼかし、風で波立つ感じに版を重ねようと考えたのですが、思う様に出来ず技術不足を痛感しました。毎回心がけている事ですが、風を空気を、感じてもらえる作品を作り続けたいと思っています。



◆◆◆◆◆全道展をアピール 初のギャラリートークを実施◆◆◆◆◆

本展開催中の6月18日(土)午後1時より、初めての事業部企画として4人の作家(各部門1名)によるギャラリートークが開かれた。作家がその作品について語り、質問も直にできる機会とあり、当日は90名近くの人達が熱心に聞き入っていた。好評だった本企画について事業部では、来年も継続する考えだ。

人物—内存する私自身

絵画=渡辺 貞之

描く

「なぜ私は絵を描き続けてきたのか？」という問いが、75歳になった今、しきりに心に浮かんできます。

絵で何を表現するのか、さらにどう表現するのか。人生の終焉がまぎれもなく近づいている今、私はその課題を考えながらキャンパスに向かっていきます。現状を直視し否定する事によって将来への進む方向を見出すという考えは色濃くなってきましたが、その為には自分自身をさらに鍛えなければなりません。

画面に現れてくる人物は、すべて自分自身の内存する姿なのだと思っています。



刷る

モチーフの原点は“喜”

版画=渡会 純价

創作とは魂の痕跡をとどめる作業だと思っている。

作品は当然、作者によって千差万別、作者の生い立ちから個性の輝きを見出せるかにある。

ギャラリートークということで己自身の作品を語らなければならない訳だが、一番苦手とする所だ。先の自分の魂を語ることではない。となると表面的な解釈が表に出て靈魂までには至らない。その人間の人生の1ページが表現されており因果応報である。

この度の作品を述べると、モチーフの原点は喜怒哀楽の喜が主流となり、それは人間の躍動であり、音楽であり飛翔の鳥や昆虫などが登場する。



石の存在

彫刻=伊藤 隆弘

彫る

作品名「The shape of drop」は日本語で「水滴の形」です。

水滴の外側に大きな水滴がかぶさった形になります。

素材は、インド産の黒御影石で比較的硬いほうの石です。

この原石を、そうとう長い期間見つめて、イメージを膨らませてきました。

デッサンをして、模型を作り準備してきましたが、最後の最後まで迷いながら石を彫り、途中でこまかくプランを変えながら制作しましたので、この作品を見る人には、インパクト的に弱く作者の意図が伝わりにくいのではないかと少し心配しています。しかし、石と言う素材はその存在感と魅力に於いて、いつも助けられています。



織る

感性を制限することなく

工芸=三好美和子

この度は作品と作品のプロセスを説明という大役を務めさせて頂きました。手織りのことを少しでも多くの方々に分かって頂きたいという願いが、人前に出ることも文章を書くことも苦手な私を何とか後押ししてくれたように思います。トークの際にお答えさせて頂いたように、主題を最初から設定することは、感性を制限することにつながる懸念を捨てきれませんが、この意味する所や、手法を含め作品を言葉にして伝えることの難しさを学ばせて頂いたように思います。又、このような機会は、私自身が染織を見つめ直すことにもなり、是非これからの制作の力につなげたいと思います。



## 忘れえぬ人たち

〔絵画〕米谷 哲夫=札幌市



いつ頃か…うんと昔の一枚。中央は久守昭嘉、右は長谷川忠男

竜頭蛇尾にならぬように始めに一言、前述したい。

光陰矢の如くで私も 90 歳になった。多くの先輩が他界し、寂しい限りだ。過去は美しく懐しいものだが、人生の遍歴は作品のテーマと密接な関係があると思う。

私は昭和 2 年、釧路に生まれた。現在の和商市場の隣りの公園で、石川啄木の彫刻があり、夏でも寒く霧の流れの中で風に吹かれ 1m 先も見えない街であった。やがて父の転勤で根室に行く。別当賀<sup>べっとうが</sup>という寒村であった。馬<sup>ばくろ</sup>喰が多く、その生活を見ての印象が後程、私の絵のテーマ「民話」に繋がった。時代は戦争が強烈に影響し戦時態勢になっていった。旧制中学校へ進学したのが苫小牧の現東高校で、中 1 の時に遠藤未満に習った。川上澄生が英語と野球の顧問であった。戦争の激化と共に教師達のスパルタ教育も暴力化し軍隊に志願した同級生は出征し、一週間以内に遺骨で帰った。勤労働員や軍事教練は激化する一方だった。卒業後、友達の世話で苫小牧の隣の錦岡小学校の代用教育で 2 年程勤め、札幌師範学校に希望した。終戦になり将来を考えたが、余り良い職業もなく一般教養授業の外、美術を専攻したのが絵画との出会いである。当時、砂田友治、小川原脩両先生の指導を受けた。卒業と同時に実家のある今の新夕張の小学校に採用され、そこも 2 年勤務、学芸大学が札幌分校となり 3 年に編入し卒業と同時に札幌市の中学校の採用試験に合格した。北海道一巨大な中島中学校に就職した。生徒数 3000 人で授業も大変であった。教員に岸本裕躬が社会科を教えており、馬の絵が校内に展示してあった。古い道展があり教員は皆、出品していたが私は 3 回出品し、グレードの高い全道展に切り替えて以降、現在まで独立展(昭和 32 年初入選)と両方に出品を続けている。当時は会友 11 名がいたが殆んどが全道展出品者だった。私は全道展 23 回展で会友、28 回展で会員に推挙された。大変遅く、46 歳であった。

あの頃の審査風景を思い出す。手元にある写真に映っている人々が懐しい。国松、高橋、岩船、小川原、西村、原、熊谷、小野垣、枅内、本田、砂田、竹内、一木、後

藤、久守…現在のように静かな多数決のみではない。作品についての論争は当り前で、立ち上がって激論になる。八木、福井等、対立し持論

を主張する。審査進行は枅内さんが大声で取り仕切った。後任に私が選ばれたが今と違い、一人で挙手の数を把握し決める方法で大変疲れたものだった。同窓に渡辺真利、野本が若手で気炎をはいていた。審査後の祝賀会は薄野のグランド居酒屋富士、安価な上に親睦交流を深める事が主であった。ロシア民謡を得意とする本田明二、あの風貌を思い出す。「美の追求、内容が大事」と力説し大いに盛り上がった。その頃は本展終了後に地方移動展があり、地方出品者との人間関係を含め交流は現在より密だったように思う。

平成 12 年 55 周年記念展の年に事務局長になったが、ここで全道展創立以来の大問題が起きた。工芸部内の分裂で会員、会友の 26 名が退会するという事態に直面したのである。今も消えない残念な記憶の一つである。

私は教職員として札幌市内の中学校校長を退職後、宮の森にある本郷新美術館に 5 年勤めた。その間、多くの美術専門家から彫刻分野だけでない様々なことを広く教えられた。現在、美術評論家で世田谷美術館長の酒井忠康氏(余市町出身)は本郷新賞の選考委員として、また佐藤忠良、匠秀夫等、日本の重鎮とは会合の場を通して得がたい経験をさせていただいた。

最後に全道展の今後の在り方、展望について私なりの思考の一端を書いておく。まず、出品者の減少と連動するように来場者の減少がある。全道展の魅力の問題なのか、時代の変遷なのか。例えば外国(米国、オランダ、ベルギー等)のように日曜日や 60 歳以上は無料にする等、参考にすべきことがあるのではないかと。更に特に現代の美意識の大きな変化についても、多くの意見があると思う。写真の拡大を良しとする流れの一方で、従来からのフォービズムを主とする派との相違はあるにせよ、もっと深求しなければと思う。いずれにしても全道展 70 年の歴史の中から、出現して来た優秀な作家がいるのだ。彼等の活躍に望みを託し、この原稿を締め括りたい。

(敬称略)



1968 年第 23 回全道展 北海道新聞社賞受賞作「民話」で新会友推薦



## あゝころと版づくりと山

〔版画〕 渋谷 正己=旭川市

2009年  
チベットを訪れた時、  
エベレストを背に写す

藪の中を走りまわり、木の枝をナイフで削ったりしていた子でした。高校では美術部と山岳部にかかわり油絵も少々、十勝岳や大雪山に登りはじめた。学芸大学（現教育大学）旭川分校に入学、同期の者3名で山岳部を立ち上げた。

北大山岳部OBの教授がおられたので部長をお願いし指導をいただいた。20名ほどの入部者があり、十勝岳、大雪山、日高山脈などが活動の場であった。その山岳部は25年あまりで入部がなく開店休業となっている。この期間、130名程の部員で山での遭難で亡くなった者が一人も出なかったのが一番安堵するものである。

さて版画であるが、1960年頃より旭川の純生展、全道展、日本版画協会展にかかわりはじめ会員として現在に至っている。版種はからくりの多い銅版画に辿りついた。技法はメゾチント、ドライポイントとなった。

エッチングは腐食液で汚れたりするのが好きになれなかった。版材は銅板は高価であり使えず、アルミ、プラスチック板を多く使用した。今では銅、塩化ビニールなどを使い分けている。プレスだけは自作できず、巾80cmのものを使っている。それを入れる時は畳を上げ土台に3寸角を入れてあります。版画の題材は十勝、大雪の山々、ネコやふくろう、花なども作っている。山々も北海道の山からより高い山、ヒマラヤ、キリマンジャロ、パタゴニアと見に行くことになった。幾度かの訪れで、エベレストの他8千メートル峰をいくつも見ることができ、5895メートルのキリマンジャロも登頂できた。

81歳になり今年よりそれら8千メートルの山々を題材として、純生展、全道展、日本版画協会展に出品したく考えております。出品する事により育てていただいたそれらの公募展を大切にしたいと思っております。

## 私と手織り

〔工芸〕 三好美和子=札幌市

46年程前(?)  
機織りを始めた頃

手織りとの出会いはもう40数年前になるだろうか。就職先が織物専門店で、それがきっかけで第一歩を踏み出した。織りは先ず「織結び・糸巻き」から始まる。

一本の糸を作るには原毛から糸の撚りが最も大切で、撚りが少ない甘撚糸は弱くすぐ切れてしまう。逆に強いと風合が無くなり微妙でとても繊細な作業だ。毎日が練習の繰り返しだったが、いろいろな種類の糸を撚れるようになった時は、とても嬉しかった事を覚えている。

いよいよ織りの段階だが、織物組織を作り整形、糸の通し方と踏木との関係で基礎である「平織・斜文織（綾織）・朱子織」を自由自在に組み上げる。初めて布地が着物に出来上った時は新しい世界が一気に広がった。

その後は「帯・大判ショール・絣」等と徐々に手織りの作業工程も高度になった。染色に使う塗料等も覚えた事は、後のシルクスクリーンの仕事に大いに役立った。

子供が小学校入学の時に札幌に移住し、同時に機織機を購入し小物のマフラーやショール等々に創作を広げて行った。そんな折、あるコンクールで入賞した私の作品を見た方から全道展への出品を勧められた。自分の感性でタペストリーをどのように作品化するか。「織る・紡ぐ・結ぶ・編む・組む・巻く」等の技法を表現手段とし、素材も従来の天然繊維は勿論、化学繊維や金属製の物質に至るまで駆使しての制作をするなかで、もっと自分の心象風景のような世界を表現できないかと思案し、突き詰めて行くようになった。

様々な工芸と同様に手織りも大変奥深く、一朝一夕に会得できるものではないし表現方法も無限といっている程にある。時には屈折も味わうが、織物の基本と技術を学んだ事が私の大きな財産になっていると思返し、初心に戻り楽しみながら、平面立体空間の作品に挑戦し、続けて行けたらと思っています。



# 創作と考察

〔絵画〕 近堂 隆志 = 函館市

## 発想の核心

造形的思考を重ねて表出した作品は、作家にとって現実存在させたりアリズムであり、鑑賞者にとっても新しい具体物なのである。

表現したい主題が具体的に眼に写らない対象であっても、画布に視覚化・可視化することは結果、リアリズムである。

空間的芸術と時間的芸術は常に対極にありながら、人間の感性の内でも反応し、芸術的な融合をしているのである。音響の領域や音楽表現の時間的芸術に強い関心と興味を持つのは必然である。音楽を絵画として表現することは極めて難しいことであるが、空間の中に時間がいつも漂っている絵画は数多くある。優れた絵画をクラシック音楽として奏でたり、自然などの視覚的なことを音楽にした楽曲も数多くある。優れた絵画の中に音楽的な韻（ひびき）の聞こえる作品も確かにあるが、音楽の流れをキャンバスに微妙なニュアンス、色彩感とハーモニー、さらに旋律として表現することは所詮無理なのかもしれない。空間の中に音響的韻を少しでも描き込むことができればと模索するのだが、未だに自己満足の範囲に交錯する程度である。凄いと感じ演奏を素直に鑑賞したり、音楽家の表現することへの考え方、日々のレッスンの取り組み方を良き手本として、絵画表現の中に生かすかが、現時点での私の課題である。

一流の音楽家の生い立ちや演奏家になるまでの修練と努力に尊敬の念を抱くのである。それはプロの画家になろうとして、自己の芸術を磨く、絶え間ない長い道のりの修行にも似た行為である。

一方画家は普遍的な空間造りに厳しいプロセスはあるものの、音楽家が鑑賞者にリアルタイムで奏でるこの厳しさの点では随分違うように思うのである。画家の作品制作を誰かが見ている訳ではないが、限られた制作条件の中で作家がイメージする、気韻まで表現する時間を惜しむことなく大切に、作家の中に第三者の厳しい観照眼を持って、制作過程の随所を評価しつつ、制作されなければならない。この観照する力は、描く力となり優れた作品として結晶する。

現代社会は多くの情報を否認無しにもたらしめている。そこは表現の発想源に成り得るものもあるが、反面溢れる情報を遮断し、自己の深層に精神を傾けた時、削ぎ落とされたオリジナルな表現が垣間見えてくるのである。五感を生かし、視覚という感性を敏感に反応させることが大切である。作為的、意識的にすることなく、極自然に画面へと導かれ、気づかされ、自己の醸した感性と反応させながら、構想から表現へ定着させたいと思案するのである。

## 表現の核心

「表出する黒韻'12」の制作にあたり造形のモチーフとして正円、弧、環、歪んだ円、白系色、黒系色、線、マチエール、ect、素材として顔料、油絵の具とオートマチックな技法を表現の手法として制作に挑むことにした。

これらのモチーフはこの宇宙をはじめ、私達の生活を取り巻く身近なところにも存在している、実にあり触れ

た対象である。また絵画のモチーフとして過去から現在に至って、多くの作家が多種多才に表現されている感がある。

このモチーフの作品は、現在も新鮮で普遍的な美術作品として記憶に焼きついている。

この単純過ぎる題材は多少のコンポジションの変化だけでは過去の優れた作品群に類似し、重流になりかねないのである。

すでに構想の段階で戸惑いを感じていたのである。しかしこの単純な象は、無限の拡がりへと求心するフォルムでいつも私の造形のモチーフでもある。

新たな発想でこのあり触れたか・た・ちを自分らしい表現にすることは、極めて難しく思えた。ややもすると制作意欲を損なうことにもなる。

制作に取りかかるまで熟考しつつ、作品制作へ気持ちは向かうのだが、新しさや変化を自分に求めるのではなく制作へ向かう精神的鮮度を保ちつつ描くことにした。

黒系色は無機質で無表情、且つ筆跡の見えない乾燥した肌合いで、あり触れたフォルムの説明からの逃避である。白系色の歪んだ環状はドリルによるオートマチックな線状のマチエールとしての律動である。この2つのフォルムは拮抗しながら内圧と外圧のせめぎあい強い音圧の対照を造り出し、動勢を定着させている。

円形の走りはコンポジションで制御し、色面や外郭線のニュアンスに神経を使い、遠心と求心に強いバランスを意識した。

僅かに歪んだ円は線描の正円によって、歪みとして確かに見せる効果であり、円を空間に留めるためでもある。

S 100 号の空間の四辺と四隅は曲面を生かす有効なスペースとして意識したい。黒色系の環の動きを画面の外へと緩やかに回転させながら逃がす余韻である。



画布の四隅は、中央の白系の質感とは少し色面処理が異なり、円系のフォルムに対比する有効なスペースとして捉えたい。対象なる形は総じて立体的な説明を省き、あくまでも色面の象としてコンポジションを定着したいと考えた。

表現のイメージのレベルを上げながら、想定内の制作が進む中で、偶発的に発生する面白い色面の現象を取り入れる鋭い感性は、制作には必要不可欠である。素材や技法の特性から発生する大切な造形の一要素として取り入れなければならない。

有り触れたモチーフであっても鋭敏な感覚と確かな表現技術の裏付けで、ごく僅かな変容を見せる作品になることを念じつつ、空間の隅々に眼を凝らすのである。

画家の仕事は一種の研究であると考えている。空間の華燭を削ぎ落とし、抽出された知的で個性的な作品は、サイエンスの分野とは違う尊い発見である。

# 作家探訪～「清野知子」

## 日本画専攻から銅版画へ

### 繊細で厳しい線に魅せられて

例年になく暖かい日が続き雪解けも早かった3月末、春の息吹を感じながら清野さんのアトリエを訪ねました。

取材：竹田 道代＝札幌市

清野邸の北側1階にあるアトリエは、開放感のある明るい10畳間で、作業台の下に収められた用具入れの引き出しや、銅板に傷を付けて色面を作る\*サンドブラストマシンと、それを作動させるエアコンプレッサー（いずれも使用時に引き出せる）が整頓されている。無駄な物が一切置かれていないため、極めて制作に集中し打ち込める空間であると思われる。（※写真左上）

〈帰ったら部屋を片付けよっ！〉

窓側に設置された銅板腐食用の塩化第2鉄水溶液（腐食時間の差で凹凸面を作る）から、銅板洗浄用の水回り、インク詰・ふき取りをする作業台、作図などをする作業台から、刷（すり）をするプレス機へ。自然光を取り入れ、奥行きのあるスペースを備えた効率の良い動線になっている。

〈制作が捗るね！〉

東側のベランダを開けると、南区の街並みとはるか彼方に西岡の山並みを望み、気分転換には最高のロケーションと思われる。〈我が家が見えるかもしれない！〉

また、今までモデルとなった草木も手入れが行き届き、生活に溶け込んでいる。

学生時代日本画を専攻した清野さんは、特別講義で銅版画と出会い、銅版画の繊細ながらも厳しさのある線と、豊かな諧調による奥深い空間表現に魅了され、学生展にも出品、受賞もされている。このところは、日本画の表現の一つである朦朧体（もうろうたい 明確な輪郭を持たず、色彩の濃淡によって形態や構図、空気や光を表す）の手法を銅版上で探究している。美しく、何世紀もかけて子孫を増やし進化する植物の強さや巧妙さに惹かれ主にモチーフにしているが、最近は珍しい植物を見つけては観察・スケッチをし作品を仕上げている、プラントハンター的な処もあると言う。

一色ずつ三版を重ね、画面に深みを醸し出す作品を前に、「もやっとしているが、何が描かれているのだろうか」と関心を持って見て欲しい、と語る。

動植物や科学、生命、医学、あらゆるものに興味を持ちアンテナを張り巡らしている清野さん、今後の作品からも目が離せない。

短い時間でしたが、お互いの作品について語り合える有意義な時間を過ごす事が出来、感謝しております。

〈〉は竹田の独り言です。



美しいロケーションと整然としたアトリエ。  
作品のモチーフになる植物は、欠かせない。

# ZEN 紙上美術館

ジャンルを問わず自由な視点で、一人の作家と作品を紹介します。今回登場するのはイギリスの彫刻家、バーバラ・ヘップワース（1903～1975）です。

## ペラゴス (Pelagos 1946)

〔彫刻〕 岡沼 淳一＝音更町



2001年に訪れた  
ヘップワースの  
スタジオの前で

東京オリンピックの年、20歳の私はミロの・ヴィーナス展を物見遊山の気分で見に行ったが、ブリジストン美術館での海の光景を切り取った様なバーバラ・ヘップワースの「トレヴァルガン」に感動した。当時の私は彫刻よりも山登りに夢中だったが、この作品が岩登りの練習に良く行っていた立待岬の岩崖や海の光景と重なり、私の背中を彫刻へと押ししてくれた。この2年後、ハーバード・リード著「近代彫刻史」で「ペラゴス（遠洋）」を見た。楡を球形に近い卵形に磨き上げ、穴を穿ち、外から内へと螺旋状に波が渦巻き、さらに内側を白色に着色し7本の弦を張った温かみのある作品に、私はますます魅了されていった。

1970年の箱根での個展図録に、スタジオの作業台や道具類が少し見える部屋やペラゴスの連作と思われる木彫作品など十数点が配置されている部屋が載っていた。この写真を何度となく見ているうちに訪ねてみたいと思うようになったが、語学力まるでダメ人間の私にはロンドンから300マイルも離れたそこはあまりにも遠く、ほとんどあきらめていた。

私が50代になったある日、遠藤ミマンさんから「岡沼君、この本に君の大好きなヘップワースのことが載っているのであげるよ」と、酒井忠康氏の「魂の樹」「彫刻の庭」を頂いた。この著に、コンウォール地方のセント・アイヴスにある彼女の生前の住居やスタジオが美術館になっていることやそこを訪れたこと等が載っているではないか。

この訪問記を手掛かりに、2001年春、妻の語学力を頼りにロンドンからレンタカーで出かけた。セント・アイ



ヴスは、函館を何分の一かにした様な陸繋島の地形で、石畳の狭い路が迷路のように入り組んでいた。迷いながら、閉館時間の少し前にやっとたどり着いた美術館の戸口はイギリスらしい白ペンキの厚塗り。中の庭園に出ると箱根で見覚えのあるブロンズも配置され、海も望むことができた。

この庭園に面したさほど広くないスタジオには彫り掛けの白大理石や様々な道具類、奥の木製の大きな扉に石粉等で白っぽくなった作業衣が数着掛けられていた。まるで先程まで彼女が作業をしていたかの様で、私は彼女がやがて夫となる画家ベン・ニコルソンと共に、1932年にブランクシーを訪れた時の言葉「アトリエに何インチも積もった埃や削り屑、高く舞い上がる形体やしんとした静かな形体などの全体に、かってない謙虚の感じを受けた」がこのスタジオにもびったりだと思った。だが、ここは図録のスタジオとは違ったが、1泊の日程だったので確かめる間もなく翌日、後ろ髪をひかれる思いで帰国した。

2003年秋、今度は図版のコピーを持って生誕100年展に出かけた。受付の女性にコピーを見せながら尋ねるが首を傾げるばかり。そこへ別のスタッフが現れたので尋ねると「少し待っていなさい」と姿を消したが、すぐに鍵の束を持って現れ「さあ」と向かいの建物へ案内してくれた。黒いドアを開け、すっかり色褪せた花柄の絨毯敷きの階段を上りながら「ここは、昔はダンスホールだった」と、話してくれた。階段を上り詰めたホールには、あの作業台と道具類が。展示室は、歩くのがやっとという間隔で置かれている作品の山。ここは作品保管庫兼修復室となっていたが、私の思いがようやく叶い胸に迫るものがあった。

コンウォールの光、海、岩崖、洞窟、白砂、丘等を主題に虚と実、曲線と直線、木肌色と白色等の「対比」の造形文法で制作された「トレヴァルガン」「ペラゴス」との出会いがなければ、私は何をしていたのかと思う。今年も全道展に向けての制作を継続できる幸せを感じている。

## 第58回学生美術全道展

— 札幌市民ギャラリー —

会期 2016年10月8日(土)～10月11日(火) 4日間

搬入 10月4日(火) 審査 10月5日(水)

陳列・新聞掲載 10月7日(金)

表彰式 10月9日(日) 搬出 10月11日(火)

## 第6回全道展新鋭展

— 大通美術館 —

会期 2016年11月22日(火)～11月27日(日)

搬入 11月21日(月) 搬出 11月27日(日)

オープニングパーティ 11月22日(火)18:00～

今年から会場が変わります。

多数の参加をお願いします。

## 2017 第72回全道展

— あなたの夢

# 全道展

から—

部門 絵画・版画・彫刻・工芸

出品料 3点まで8000円、1点追加ごとに1000円

23歳以下出品料半額

(1994年4/2以降に生まれた方)

搬入 6月6日(火)・7日(水)10時～17時

賞 全道美術協会賞・北海道新聞社賞

八木賞・佳作賞・奨励賞

※全道美術協会ホームページからもダウンロード可

<http://www.zendouten.jp>

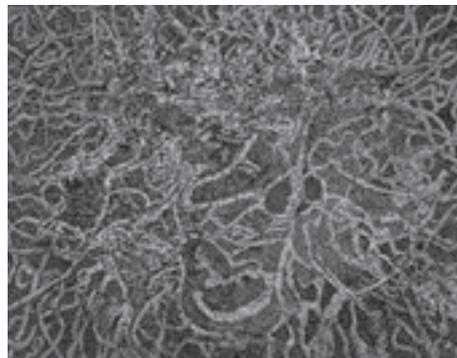
「会期」 2017年6月14日(水)～6月25日(日)

札幌市民ギャラリー(中央区南2東6)

10:00～18:00(最終日16:30)\*19日(月)休館

「入場料」 当日券800円 前売券600円

23歳以下・障がい者無料



第71回全道展最高賞 絵画 宇佐美修一「樹底」

— 生命の讃歌 — 生誕100年記念

## 砂田友治展開催

苫小牧市美術博物館で4月29日(金)～6月26日(日)

現・苫小牧市生まれの砂田友治は生前、独立展、全道展を中心に出品、受賞を重ねるなど戦後の北海道美術界に大きな足跡を残した作家の一人だった。

60年に亘る長い画業の中から展示された作品には、北洋漁業の漁師たちを題材とした代表作《北海の男たち》シリーズをはじめ、《王と王妃》など一貫して“人の生きる在り様”に向ける砂田友治の慈愛に満ちた眼差しがある。他にもスケッチや手記など、一人の作家が生まれ育った故郷の自然風景のイメージと、人が織りなす根源的な営みが表出された作品の数々が来場者を魅了した。

また関連イベントに美術評論家、鈴木正實氏を迎えての講演会やギャラリーツアーなどの充実した企画も好評で、盛会のうちに閉幕となった。



— 混沌のベクトル — 岸本裕躬回顧展

深川市アートホール東洲館で5月1日(日)～5月15日(日)

アートホール東洲館では特別企画として、第2回岸本裕躬回顧展が開かれた。1991年の退会後も精力的に制作発表を続け、2011年に長逝するまでの岸本の作品、36点が展示された。会場には今も鮮烈なオーラが漂う。多くの画家、特に若い画家たちに衝撃を与えた岸本作品は森羅万象に寄せる独自の洞察力と視点があり、それが絵画空間に余すところなく表現されている。

今回を含め今後3回の展覧会が予定されているとのこと、ぜひ一度は足を運んでみることをお勧めしたい。

### ● 編集後記 ●

「ZEN」が発行されるまで一企画立案後、レイアウトの作成と並行し寄稿の依頼交渉、ここまでが第1段階。次に受諾者の原稿や写真等を入念にチェックする。見出しを考え、字体を選び全体のバランスを再検討し印刷業者に渡すまでが第2段階。その後、数度の校正を経てようやくゴーサインとなる。編集担当者はこのルーチンを2年間担う。「ZEN」がより有益な情報・交流紙であることを願い、第52号をお届けします。

〈川名、石本、(文責)米澤〉